

6 防除対策推進上の問題点及びその対策

農作物名	病害虫名	問題点	対策
水稲	トビイロウンカ	・5月下旬～6月上旬植の圃場において坪枯れが見られたが、少発生。 ・主要飛来期に箱剤の残効不足、8月上旬の防除未実施。	・生産者段階における圃場単位での発生状況把握と早期防除徹底 ・株元に薬剤が十分付着するような薬剤散布の徹底 ・主要防除薬剤に対する薬剤感受性の把握
	コブノメイガ	・飛来が少なかったことで8月上旬の基幹防除を抜いた圃場で第2世代幼虫による被害が見られた。	・箱施薬剤の的確な使用と移植時期の適正化
	縞葉枯病とヒメトビウンカ	・平成16年以降ヒメトビウンカの保毒虫率が高く、縞葉枯病も多発傾向で推移している。 ・5月下旬～6月上旬に移植される地域での発生が多かった。イミダクロプリド箱剤施用地区で発生株率が50%を超える激発圃場も認められた。 ・発病株の抜き取り不徹底	・ウイルス保毒虫率の把握 ・主要薬剤に対する薬剤感受性の把握 ・発病株の抜き取り徹底 ・冬季～春季の耕起の徹底 ・小麦作付け地域でのヒメトビウンカの防除実施
かんきつ	かいよう病	・ストレプトマイシン剤のかんきつ登録が失効し、果実着生時に薬害の問題がなく、防除効果が高い薬剤がない。	・発芽期から幼果期までの防除の徹底 ・防除効果が高い薬剤散布体系の確立 ・防風樹の整備や発病枝葉のせん除など耕種的防除の徹底
果樹全般	カメムシ類	・8月以降、カメムシ類の果樹園への飛来が増加したことを巡回調査等で把握したが、県内4カ所に設置しているフェロモントラップでは誘殺量に大きな変化が見られず、実際の発生量とフェロモントラップ誘殺量に差が見られ、注意報の発表がやや遅くなった。	・口針鞘数による飛来予測日に比べ実際の飛来が早かった原因の解析が必要である
キュウリ、メロン、トマト、ミニトマト	タバココナジラミ (バイオタイプQ) トマト黄化葉巻病、キュウリ・メロン退緑黄化病	(1) タバココナジラミ ・アスパラガスでの発生が目立つが、有効薬剤が無く、防除に苦慮している。 (2) トマト黄化葉巻病 ・一部、早い作型で多発圃場があり、周辺への感染源として懸念される。 (3) キュウリ・メロン退緑黄化病 ・メロンでは果実品質(糖度)への認められた。	・夏～秋におけるタバココナジラミの発生量や媒介ウイルスの保毒率調査など、予察技術の確立
イチゴ	炭疽病	・ランナー切り離し時期に雨が続き、一部で作業が遅れた。 ・生産者段階で汚斑状斑点の区別がつかず、廃棄処分の判断が難しい。	・伝染環を遮断するため、無病親株生産システムの確立。 ・生産者や指導機関に対する育苗期の病徴判別能力の向上。 ・新規有効薬剤の登録。
キュウリ、メロン	黄化えそ病 (MYSV)	・これまでアザミウマ類の発生があっても、直接的な被害が少なかったため防除対策の徹底がなされていなかった。 ・きゅうりの周年栽培が行われており、作型間のハウスの空き期間が短いいためアザミウマ類の防除対策が十分に行なえていない。	・粒剤体系の導入 ・薬剤防除体系の検討 ・新規有効薬剤の登録